
ため息いくつ

早見徒雪

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ため息いくつ

【Nコード】

N7173P

【作者名】

早見徒雪

【あらすじ】

恋も仕事も人生も、どれもみな片意地張って頑張ってきたつもりなのだけど、何ひとつ思い通りにいかないままにそろそろ30の声を聞く年になってしまった島田。そんな時、彼女を男でひとつで育ててくれた父親が入院してしまう。父とあらためて語り合い、過去や今の自分を見つめなおす機会を得た彼女は、すべてをリセットして、新たに出直そうと考えるのだが……。

その一

「いいかげんにしろ！ 製品がおかしいにきまつてるんだよ！ 少しは誠意ある態度をみせるよ、この三流メーカー！」

客は最後には一方的にまくし立て、ガチャリと電話を切ってしまった。まるで実際に電話線が力任せに引き千切られたかのごとく、うわんうわんと響いたいやな感じが、私の耳を通して心の奥底まで沈んでいくのがわかる。怒鳴られキレられることは、これが初めてではないけれど、だからといって決して慣れるようなことではない。私はヘッドセットを外すと、大きなため息をついた。

「島田」

背後からの声に振り向くと、同僚の相川がすぐ側に立っていた。ああ、そうだった。世界には私とあの客だけがいるのではなかったのだ。少しだけ、私はほっとする。

「どうよ」

私はしかめ面をして、さらにお手上げのポーズをして見せた。

「ウチの商品がおかしい、の一点張りよ。リコール品じゃないのかって」

「へえ」

私はとある無線機器メーカーのコールセンターに勤めている。商品を購入した客への電話による設定サポートやトラブル解決が主な業務だ。

「おかしいのは、このおっさんのこっちの方だったの」

私が頭を指で叩くを見て、相川は「かもな」と言っただけで肩をすくめ、人懐こい笑みを浮かべた。相川は同期入社だが出世頭であり、先に現場を統括するリーダー職についている。スキルが高いのはもちろんだが、この愛嬌のよさが、周りや上の人間の覚えがめでたい大きな理由なのだろう。

「過去の対応履歴は読んだ？」

ここ十数回にわたる激闘の歴史である。

「ええ、拝見いたしましたとも」

「それはそれはご苦労様」と私が深々と頭をたれる振りをすると、
「どういたしまして」と彼もそれに応えるしぐさを見せた。

「こつちで一応検証済みの新品と交換して、本体とアダプタ側にそれぞれ外部アンテナをつけて、一メートルと離れていないところで、複数のパソコンでも接続が安定しないのは何故でしょう？」

「そりゃ、リコール品だからでしょ」

「ご明察。……って、このクソオヤジにも言ってやりたいわ」

世はまさしくワイヤレスの時代。寝ても起きてても、二階だろうと地下室だろうと、いつでもその場でインターネット。簡単楽々、家庭円満商売繁盛。……などとうたってはいるものの、まだまだ無線での通信はちよつとしたことで安定しないのが現状だ。原因はいろいろ考えられるが、利用環境に依存する場合はほとんどであり、もちろん機器自体の問題も少なくはないが、その場合は製品の交換で改善するだけの話である。

「まあ、現場をみないことにはなんとも言えないけど、環境が問題である可能性は強いだろうな」

コールセンターの客と言うものは、ほとんどがパソコンだのインターネットだのをまるでわかっておらず、操作もおぼつかない初心者ばかりで、今回のように無理難題を吹っかけてクレームを引き起こす客も少なくなかった。

「それを訥々と説明してあげてんだけど、聞く耳を持たなくて」

「なるほどね。耳がないんじゃないかな」

相川は私の肩をぼんと叩いた。

「今の対応の記録を保存したら、一息入れてきな。後の対応は俺が引き継ぐから」

「相川が？」

思わず私の声も大きくなる。

「どうして？」

「どうしてって、ウチのエースをいつまでもつまらないクレーム対応にかかりつけにしておくわけにはいかないからさ」

彼は笑みを絶やさない。それに比べて私はそれまでと違い、自分の眉間に深いしわが刻まれていくのを感じていた。

「あたしじゃ役不足っていうの」

「そうじゃない。こっちも向こうも気分転換が必要だってことさ。上司が出て侘びの一つでも入れれば、あちらも気が済むだろう」

「だからおかしいのはあいつの方だって」

「ハナから相手に偏見を持っているから、すぐにあんなけんか腰の対応になるんだよ」

「……聞いてたの」

エージェントの電話対応は、一応録音もされているが、中央のブースにていつでもリアルタイムにモニタリングすることもできる。

「はじめからな。……監視するのも、上の人間の勤めだから」

『上』の部分に力が入っていた。

「あたしは、間違ってるよ」

「かもな」

相川は不意に顔を近づけてきて、声を潜めた。

「でも、最近お前さんの対応は荒れがちだぜ。今度の件も、以前の島田ならとうにケリはついているはずだ。もうどっちが『正しい』かっていうレベルの問題じゃあないんだ。わかっているだろう？」

「……」

「まあ、任せときなってる」

相川は顔を上げると、大きく伸びをした。

「それに『上』の言うことは素直に聞いておいたほうが無難だぜ」
私がちらと中央ブースに目を移すと、このコールセンターのセンター長と目が合った。だが、この「プレーリードック」というあだ名の上司は、すぐに自分のディスプレイの影に隠れてしまった。おそらく彼が相川に交代を指示したのだろう。そして後の尻拭いも、押し付けたに決まっている。私はふてくされたまま、すばやく対応

の記録を保存し、パソコンにロックをかけて立ち上がった。大きな音をたてたので、周りの注意を引いてしまったが、気にしないそぶりをして大股でその部屋を出た。相川やセンター長の視線もあえて無視した。

他の人間に言われたのなら、こつもすこすごと引き下がることはなかっただろう。だが相手は相川だ。彼ならきつと何とかしてくれるだろう。彼ならきつちりケリをつけてくれるだろう。それはわかっている、しかし。

それが自分の役目ではないということが、今の私にはとても悲しかった。

その二

その日の夜、業務が終わって私がひとりで喫煙所で煙草を吸っていると、相川が顔を出した。

「例の件、けりがついたよ」

彼はポケットから自分の煙草を取り出しながらそう言った。

「……そう」

「気になつてると思って、一応ご報告」

相川はくわえた煙草に愛用のジッポで火をつけると、例の笑顔を見せた。

「……あたしの獲物だったのに」

「俺も仕留めたわけじゃない。丁重に野に放ったのさ。もうウチの製品を使つていただく必要はございません。お金はお返し致しますので、他社の製品をお求めくださいってね」

「あのおっさんはそれで納得したの」

私はちびた煙草を灰皿に押し付け、すぐさま別のを口にくわえた。このブースに入ってから五本目だ。しかし私のライターはガスが足りないのか、変に力が入ってしまっているせいか、なかなか火がつかなかった。私がますますイライラしてくると、相川が自分のジッポをつけて目の前に差し出した。なんだかそのスムーズな動作にさらにカチンと来てしまったので、火がついたとたんに大きく吸い込み、煙を彼に吹き付けてやった。相川は動じず、おどけて咳き込むまねをして見せるだけだった。

「まあ、でももう電話はしてこないよ」

彼がそこで肩をすくめたのは、くだんの客に対してかそれとも私に対してなのか。

「今度は別メーカーのサポセンが苦労させられるのね」

「他社のならつながるかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でも駄目なら、まともな人間なら、少しは自分の環境も疑うだろう

ね」

「まともな人間なら、十数回も電話なんかしてこないわよ」

「かもな」

狭い喫煙所の中に、白い煙が濃く漂っている。換気ファンの鈍い音と振動が、かすかに響いていた。そういえば、私が煙草を吸い始めたのはいつの頃からだったろう。こんなにヘビースモーカーとなったのは、いつからだったろう。

「最近のあたしって、そんなに荒れてる？」

私の不意な問いかけに対し、しばらく待ってはみたが、相川は何も答えなかった。

「言ってよ」

「それを聞いてどうすんの」

相川は逆に問い返してきた。どこか寂しそうな目つきをしている。それは同情？ 哀れみ？ その両方？

「納得したいだけよ。自分が無力であるってことを」

「だから、納得してどうすんだよ」

相川は私よりも少しだけ背が高いはずなのだが、今正面に向かい合った彼は、普段よりも大きく見えた。私はそれに負けまいと、両の足を踏ん張って、上目遣いに相手をにらみつける。

「先に聞いているのは、あたしの方よ」

「調子の悪い時は誰にだってあるさ。別に電話対応に限った話じゃない。うまくいかないと思ったときはばっくれて、出来る奴にすべて任せちまいな」

「それって『逃げ』じゃない」

彼は短くなった煙草をもみ消した。だが次の一本には手を出そうとはしなかった。

「だからって、何もかも自分ひとりで背負い込む必要もないと思うけどな」

普段の相川となら、馬鹿なことを言ったり軽口を叩き合ったりと、普通に会話のやりとりをすることも容易なのだが、時々、今回のよ

うな独特な表情や仕草を見せるときがあり、そんなときにはその真意が計りかねて、私はいつも戸惑ってしまうのだった。それでも必死に虚勢を張り続ける私の目を、まっすぐに見つめ返す相川を前に、言いたいことは山ほどあれど、しかし私はそこで口をつぐんでしまった。

私にはその時、この後の展開がどのようなようになっていくかが、痛いほどわかってしまったからだ。彼は私の心情などを慮って、慎重に言葉を選びながら正論をぶつけて諭してくるだろう。それに対し私は、子供のような駄々をこね続け、それを重ねていくことだろう。そんな不毛な議論がどう続けていったって、私が『負ける』ことは目に見えている。だが、だからこそ、それを認めることだけは、今は、特に今だけは、どうしても嫌だった。

私は強引に視線を断って、口をつぐんだ。そして私も次の煙草に手をつけようとはしなかった（また彼のジッポを借りることになるではないか！）。やがて少しの間の沈黙のあと、今度は相川の方が口を開いた。

「久しぶりに飲みにもいかないか。おごるぜ」

「懐柔？」

「かもな」

「おあいにくさま」

私は精一杯の虚勢を張って、すました顔で彼に向き直った。

「これから男の人と会う予定があるの」

まあ、これは少なくとも嘘ではない。

その三

「父さん？」

私がベッドのすぐ傍に立って声をかけると、ベッドに横になっていた父はけだるそうに片目を開いて私のほうを見、すぐに目をそらして低くため息をついた。

「……知らせたのは美津子だな」

「まあね」

私はベッドの下からパイプイスを引っ張り出して腰掛ける。

「叔母さんの他に誰が教えてくれるっていうの」

「美津子とはちよくちよく連絡を取っているのか」

「まあ、たまにね。電話で話すぐらいかな」

「……あのでしゃばりが」

父は舌打ちをして、起き上がった。叔母が週一の割合で私の携帯宛に電話を寄こし、時には予告なく私のアパートを直接訪れる、とは言わないでおいた。おそらく父の元へは、それ以上の頻度で、何かと理由をつけて顔を出しているに違いない。まあ、それはそれで私は叔母を非難するつもりもない。彼女は彼女なりの心配の仕方があり、それなりの付き合い方もあるのだ。まあ、ものの程度はわきまえてはもらいたいとは思っただけれども。

「でも、自分の父親が入院したことすら知らない娘がいたら、世間は何なんて思つかしら」

「たいしたことじゃない。わざわざ知らせることもなかったんだ」
父はますますぶっきらぼうに答えた。

「手術が必要だって聞いたよ」

叔母の言葉を借りれば『生きるか死ぬかの瀬戸際』という事になる。

「『念のため』だ」

「そうなんだ」

私は笑いを殺しながら答えた。父に会う前に、既にある程度までの話は耳に入れてある。なんでも、かかりつけの病院で年に一度の健康診断を受けた際（定年後も律儀にそういうことを欠かさない父にはまったく頭が下がる）、胃に腫瘍が見つかったらしい。そこで大学病院で再検査を受けたところ、悪性のものではないとのことであつたが摘出を勧められたという経緯らしいのだ。「手術自体は難しいものではないし、終われば数日で退院もできますよ」とは、先程お会いしたこの先生の弁。こんな場合でも叔母の話ぶりからすれば、それこそ胃を全摘出しても助からないような大事態、ということになつてしまう。やれやれである。

とまれ、これまで風邪一つ引いたということのない父の入院というニュースは、確かに私にとっては衝撃ではあつたのだが。

「とりあえず、今は仕事も忙しくないから、退院までは毎日様子を見に来てあげるよ」

「いらんいらん。わずらわしい。美津子にも来るなといつておけよ」
「言うだけは言ってみるけどね」

世話好きの叔母が聞く耳を持つとは思えない。どうして兄妹でここまで違うように育つたのやら。

「でももう退屈しているんじゃない？」

「……」

父がまた目をそらす。おそらく凶星だろう。父は何事も自分の手でやらねば気がすまないたちで、せっかちなところもある。何もない何もできないところで、何日もぼうつとできるようなタイプではないのだ。さらに嘘をつくことも苦手ときている。

「時代小説の新しいのが出てたら買ってくるよ。それとも将棋の本のほうがいい？」

「……好きにしたらいい」

その言葉は、私に対する父の口癖のようなものであつた。母が幼い頃に亡くなって以来、父は男手ひとつで私を育ててくれた。厳しい人だったが、子供の自主性も重んじる人で、社会的倫理に反しな

いことであれば、なんでも好きなようにさせてくれた。特に大人になつてからの私が選んだことに対して、父が反対をしたことはない。「好きにしろ」と言う言葉は、突き放しているようにも聞こえるが、そこには私に対する深い信頼があつてこそだと思つてゐる。私はちよつとだけ安心した。

「うん、わかつた」

私にとって父は、数少ない尊敬に値する人物であり、またすぐれた人格者でもあつた。これでその娘もさらに立派な人物に育つてくれれば、めでたしめでたしなのだが……。

なかなか現実はそのうまく行きはしない。私は少しやつれた感じのする父の横顔を見ながら、あれこれ思いをはせていた。

* *

私が父から受け継いだもの。

私が父から受け継げなかつたもの。

病院からの帰る道すがら、そのことについて深く考えていた。不器用さと頑固さ。これは前者。スキルと技術。こちらは後者。叔母にしてみれば私達父娘は「似たもの親子」なのだそうだが、それはあくまで一面から観た分析に過ぎない。

私はなんとか父の信頼に応えようと努力してきた。早くに独立もしたが、大学も就職先もそこそのところしか引つかからず、結局は地方の電話対応係に落ち着いたのだった。さらにその中でも出世もなかなかおぼつかず、長い間ヒラのままである。では女としての幸せはどうかというと、これがまた連戦連敗続きときていて、日ごろは何かと異性よりも同性に慕われることの方が多いと言つのは、よろこんで良いのか悪いのか。合法非合法関係なく、孫の一人や二人の顔でもみせてやれば、まだ「娘」としてのノルマを果たせただろうに。今のご時世に仕事があり、それでなんとか食べていけるだけでもめつけものなのだろうけれども。

このところ私は、あらゆる面において行き詰まりを感じていた。これまで培つてきたことがすべて無駄なことのように思え、暗い影

をおとす未来予想図に辟易していた。やることなすことが空回りして、終始苛立ちを抑え切れないでいた。

しかし、だからといって、自分が何をすればよいのか、何をすべきなのか、いくら考えても解答は何一つ得られないままだった。そのことに対する徒労感だけがひたすら蓄積されていく。帰宅する足取りもだんだんと重くなる一方であった。

私は確かに疲れていた。思い通りにならない人生に。解決法を見つけないことができない出来の悪さに。本当に、一体いつからこんな風になってしまったのだろう。

私はそんな堂々巡りを抱えこんだまま、近くの駅に着いて、そこから電車へ乗り込んだ。帰宅ラッシュの時間帯はとうに過ぎていたが、そこそこ込み合っている車内の人ごみをかき分け、中央まで進んでいくと、対面の席に座っていた女の子と目が合った。

「あれ、島田さん」

それは社の総務部に勤める眞子ちゃんだった。

「あれ、今帰りのの？」

「そうなんですよ。なかなか終わんなくて。いやになっちゃう」

さほど大きくもないウチのような地方支社において、彼女のいる総務部はそれこそまさしく何でも屋と呼ぶにふさわしい部署である。一般事務や広報に経理、はたまた人事にいたるまで、すべてここが賄っているのだ。人員もさほど多いわけではなく、余計な多くの雑務も抱えるその部署で、彼女はてきぱきと仕事をこなす有能な人材として有名だった。

「あ、そうだ。お祝いありがとうございます。ゆうべ届きましたよ」

「ホントに？ あんなのでよかったのかな」

「とんでもない。すごくうれしいです。島田さんセンスがいいから、こっちが恐縮してしまいます」

明るくて美人で社内アイドルでもあった彼女だったが、近々結婚を控えており、今月いっぱい退職することが決まっていた。お

そらく今日は日々の業務に加え、退職前の雑務整理で忙しかったに違いない。

「ありがと。そう言ってくれるの眞子ちゃんだけだよ。相川なんていつも『島田の選ぶものは独特で、ゴーイングマイウェイすぎる』って馬鹿にしてくるんだから」

「ええー、相川さんそんなこと言うんですか。ひどーい」

相川がいつもそんなことを言うものだから、今回は無難なキツチン雑貨を選ぶよう心がけたつもりなのだ。まあお世辞半分とはいえ、喜んでもらえたようで何よりである。

「自分だって唯我独尊って感じなのになー。知ってる？ 相川って変な携帯のストラップ集めるのが趣味なんだよ。木彫りのだったり、古めかしかったりなんか汚れてたりしているのばかり。なんかオタクっぽいよねー」

前にいくつか見せてもらったときは、なんかその素材になった杉の木はすごく貴重なものとか、この装飾が非常に手が込んでいるんだとか、とくとくと説明されたのだが、もうすでにその時点で右から左へスルーしてしまっていた。そういえば、「これはストラップじゃなくて、『根付』と言っんだ。間違えるなよ」とかもいつていたっけ。

「ええーっ、ホントですか。最後の最後でイメージ変わっちゃいましたよー」

「まあ、長い付き合いだからね。何でも知ってるよ。他にもねえ、こんなことがあってねえ……」

私が降りるべき駅に着くまでの短い間、とりとめのない社内の噂話をして盛り上がった。昼間の件があったためか、どうも私の話す話題は相川がらみの話が多くなっていた。そんな私のつたない話に、彼女は明るくかつ控えめ（さすがに回りに人の目があるので）に、コロコロと表情を変えながら応えてくれていた。彼女はきっと私が得られなかったものをはじめからたくさん身に着けられているのだろつ。今後家庭に入っても、それこそそのコミュニティーに属した

としても、すぐにまわりに溶け込んで、すんなりうまくやっていくに違いない。いつも、常に場の中心を担う役どころになるのかも
しれない。

別に人としての「生きかた」なんて大げさに考えるつもりは毛頭ない。ただ普通に日常生活を送る、それだけでもうまくできる人
できない人が出てくるのはなぜだろう。彼女と別れてから、そんな
考えもふつと浮かんできて、私はさらにちよつと悲しい気持ちとな
って、そんな思いを振り払おうと、せかせかと足を速めたのだった。

その四

「島田さん、ちょっといいかな」

数日たった業務終了後、私が帰宅の準備をしていると、「プレーリードック」がすかさず声をかけてきた。私はしまいかけの荷物もそのままに、中央のリーダーブースへ向かった。ブースにはそのセクター長しかおらず、相川はシフト休暇で不在だった。

「ま、とりあえず、座って座って」

特に席を立つわけがなく、短い腕をせかせか動かしながら促す。私は空いている椅子を引き寄せ、彼と向き合うように座った。

「ええと、龍田さんが結婚退職することはしっているよね」

龍田さんとは眞子ちゃんのことである。何をいまさら。先日、この部署からも、結婚祝いを出したばかりではないか。

「龍田さんは長年、この会社の総務をすべて仕切ってくれた人だよ。ね。若いけど、細かいことまでよく気が付いて、まあ、おかげでつい彼女におんぶに抱っこになっちゃって、ほんとになんでも龍田さんをお願いしてきちゃったのは申し訳ないことなだけども」

この小さくて小太りの上司は、小声で矢継ぎ早に言葉を発しながら、終始体をゆすつたり、首や両腕を小刻みに動かしていた。「プレーリードック」のあだ名は、このせわしない動きが小動物を連想させる点に起因している。もちろん「かわいらしい」とか「愛らしい」とは間逆の意味で。

「だから、彼女の後任には、仕事のできる人、事情をよく飲み込めている人、スムーズに引き継ぎができる人が必要になるんだよね」

クドクドと回りくどい話が続く。彼はなんでも本社、とりわけ社長に大きなコネがあり、そのからみでこのトップにすえられたという噂があった。まあ、そうでなければ技術的なスキルはもちろん、最低限のヒューマンスキルですらまともに身に着けていないように見える人間が、人の上にたつ立場に抜擢されることはないだろう。

「でもさ、ほら不況とはいっても、なかなかいい人材って、見つからないわけだしさ。龍田さんに結婚後も、ウチの仕事を続けてもらうようお願いしたんだけど、でもほら、なんかもうお腹の中に赤ちゃんがいるらしいじゃない。じゃあ、しょうがないよね。女の人って、こういうことがあるからな。でも大変だよ、これからの育児とか。専業主婦で、やっていけるのかな」

あなたの目の前にいるのも一応「女」なのだが。しかもい自分が、どんな問題発言をしたのか、わかっていけるのか？

「で、いろいろ相談したりして、考えたところ、島田さんに白羽の矢がたつたわけ」

「……は？」

って、いきなりなにを言い出すんだこの人は。

「島田さんに、龍田さんの仕事をね、引き継いでもらいたいんだ。来月から総務部に移ってもらいたいんだよ」

「どういことですか」

「いや、だからね、さっきからずっと説明しているんだけど」

「どうして私が総務部の仕事しなければならないんですか。私はテレフォンオペレータとしてこの会社に入社しましたし、これまでずっとテレオペしかしてきていないんですよ」

私は矢継ぎ早にまくし立てた。もちろん電話ばかり出ているわけではなくて、新人教育とか勤務スケジュール調整などの業務も経験はしている。だがそれらはあくまでこの「現場」での仕事の一環なのだ。総務部に移れ、ということはまったく違うことを一からはじめろと言っているに等しい。

「だけどさ、ほら、島田さん、ウチに来てから結構たつでしょ。この部署での業務だけじゃなくてさ、会社全体の流れているか、大分把握しているでしょ」

「ですが」

「大丈夫だよ。島田さん、技術スキル高いし。どこの部署だってやっっていけるよ。きっと」

私に口出しさせないよう、相手は私の言葉尻に覆いかぶさるのよ
うに、あわてて言葉をつむぎ続ける。

「なんで私なんですか」

私はあがり続けるトーンを低く抑えて、ピシヤリと返した。

「私よりスキルが高くて、私より長く勤めていらっしやる方は大勢
いらっしやいます。中にはこの実情や、円滑に運営するためのノ
ウハウに長けた方もいらっしやるでしょう。そんななかで、どうし
て私が選ばれたのか、納得のいく説明をお願いします」

「でも、ほら、こういうことは、女の人の方が、うまくやるじゃな
い、ねえ」

だ・か・ら。それはセクハラ以外のなにものでもないんだってば！

「それはともかく、今後のことも考えるとね、島田さんにはね、テ
レオペだけじゃなくてね、いろんな仕事を経験してみるってのも、
決して悪いことじゃあないと思うんだよ」

それだと『私』がやらねばならぬ理由にはならない。

「あと、ほら、最近島田さん、疲れているっていうか、ストレスが
たまっているっていうか、なんかいろいろ悩んでいるって話も、耳
にしたからさ。楽な業務に移って、はたらく場を変えてみるのも、
心機一転になるかな、と思ってる」

これもひどい。総務はここより格下の部署だと思っっているらしい。
実際の業務を把握していれば（もしくは人間的にしっかりしていれ
ば）、そんな軽はずみな発言はできないはずだし、私の立場を降格
させると同じ意味を言ってるのだということにも気づいていないよ
うだ。

しかしそれより何より、

「私が『悩んでる』って誰が言っていました？」

私にとっては、こちらの方が問題発言だった。

「え、あ、いや、確か、相川君が、なんかそんなようなことをね、
言ったような言っていないような」

その名は有刺鉄線バットで後頭部を殴られたような衝撃だった。

相川が？

相川も私を必要とは思っていないということなのか。

「じゃあ、……私はここではいららないと言うこと、なんですね」

思わずそんな言葉が口に出た。そういうことなのか？

「いやいやいや、そんなことは言っていないよ。島田さんは必要な人材だけれども、会社全体のことを考えるとさ」

「……」

「どうかな。これは島田さんにとっても、ホントいい話だと思うんだけどな。了解してほしいなあ」

「……考えさせてください」

私はまたグダグダ発言しようとしているセンター長の言葉を断ち切った。

「今日は家族の都合で早くに戻らないといけないので。このことは近日中にお返事いたしますから」

「あ、そう。そうだよね。すぐには答えだせないよね。でもね、できればね、なるべく早いうちに返事をもらえるとありがたいんだけど」

「わかりました」

私は相手の顔を見ないままに頭を下げて、急いでその場を離れた。頭の中をぐるぐると何かが回り続けていたが、心の方はぼつかりと空洞が空いていた。

必要とされていないのに、この場に残るなんの意味がある？ か
たくなに意地を張り通して、何の徳がある？。

「……」

私はすぐに荷物を持って外へ出た。誰もいない寂しい廊下でひとり、また大きなため息を、ひとつ、ついた。

その五

「すごい。どうしたのこれ」

私が父の病室を訪れてみると、ベットの横には果物入った大きなかごが置かれていた。

「今日、美津子と一緒に伸一君の家族がやって来てな」

伸一君は私のいとこで、美津子叔母さんの息子である。私なんかと違い、早くに結婚もして子供もいる。

「へー、島根からわざわざ？」

彼はたしかあちらの原子力発電所で働いている筈だ。

「家族で東京へ遊びに来たついでとは言っていたが、どうせ美津子呼び出したにきまつとる」

大型連休でもないのに、さすがにその言い訳はかなり無理がある。どうやら上手い嘘がつけないのは、わが一族の血筋のようだ。

「でもすごいね。いくらぐらいしたんだろ」

「知らん。欲しければ持っていってもいいぞ。お前の職場の人たちにあげたらどうだ」

「……うん。そうだね」

私は父が入院していることは、相川にも話していない。さしたる理由があるわけではないが、大病をしているわけでなし、へんな氣遣いをされるのもいやだったのだ。

「そつえば、明日なんだよね。手術」

「そうだな」

そのために明日は休みを取ってある。私は会社の人間と顔をあわせることが、一日先延ばしされたことに、少しだけ安堵していた。

「……心配？」

「何がだ」

「うつん、何がっていうわけじゃないんだけど」

私は大きくかぶりを振った。むしろ心配をしているのは私の方だ。

大騒ぎしている叔母の影響ではないけれど、自分の身内が、手術する・体にメスを入れるということは初めての経験だったし、たとえば、些細な病で簡単な手術だと頭でわかっていたとしても、不安の方が先走りしてしまっていた。

「せっかくだからなんか食べていくか」

「えっ」

「その引き出しからナイフを出してくれ。あと皿もな」

私が言われたとおりの品を渡すと、父はかごから林檎を一つ取り出して、皿をテーブルの上に置き、器用な手つきですると皮を剥いていった。

これなどが、私と父の違いを示すいい例だろう。私はこの皮むきがどうにも苦手だった。厚さも一定せず、指先も傷だらけになることばかりで、危なっかしい手つきでどうもうまくできない。そんな私を見かねたのか、いつしかそれは父の役割となっていて、私の役割は、その手馴れた腕前を拝見し、その成果をおいしく頂戴することとなっていた。

「……父さんのところに帰ろうかと思ってるの」

急にこみ上げるものがあり、私はポツリとつぶやいた。父は手を止めて、私の方を見た。

「また急に今回みたいなことがあったら大変じゃない？ やっぱり年寄りの一人暮らしは何かと心配だしね」

「俺のことは心配いらんといったはずだ。お前にはお前の生活や仕事があるんだからな」

「うん、そうなんだろうけどね」

私は頭の中で必死に良い言い訳を考えていた。だが何を言っても、それは私の都合、私のわがままに過ぎず、結局口に出たのは、

「会社辞めるつもりなんだ」

と言っ言葉だった。今、この瞬間まで迷っていたのに。……ああ、ずるいなあ。私。

「なんかね、ちょっとね、いろいろあってね。たいしたことじゃない

いんだけど。いったんゆつくり時間をとって、資格でも取ろうかなって、思っで。あ、介護の勉強をするのもいいかな」

「……」

「仕事辞めるとき、やっぱり節約とかしないといけないじゃない？ そうなると一緒に住んだ方が経済的だと思うし。でも、三ヶ月もすれば失業手当も出るし、次の仕事見つかるまで、バイトしてもいいし。もちろん、なるべく時間に余裕のある仕事を選ぶよ。で、空いてる時間は、いろいろとき、協力というか、お手伝いするよ。買い物とか掃除とか。……ええと、……ダメ、かな」

私の態度とその発言内容は、先程のセンター長のそれと似たりよつたりのひどいものであった。相手の都合も考えない、一方的な欲求のこり押し。私は自己嫌悪と恥ずかしさで真っ赤になり、深く頭をたれ始めた。

「……好きにしたらいい」

その言葉に私が顔を上げると、父はいつしか林檎の皮むき作業に戻っていた。

「やってもらいたいことは山ほどある。楽をしようと思っても、そうはいかんぞ。もうお前も大人なんだから、以前ほど甘やかしたりはしないからな」

父は私の方は見ずに、ひたすらに作業に進めながら話すのであった。

「……そうだな。一緒に住むようになったら、まずはまた、この皮むきの仕方でも教えてやるか」

そうして林檎は皮が途中で切れることもなく、きれいに剥き終わった。父はそれを四つに切り、芯を取ってからさらに半分にした。そして八等分された林檎の一つに爪楊枝をさし、私に差し出した。そこではじめて、父は私の顔を見た。私はきつとひどい顔をしていたと思うが、父の方は笑うでも悲しそうなわけでもなく、ただ穏やかな表情をしていた。

「ありがとう。父さん」

私はそう言つて、父の剥いた林檎を受け取つた。それはみずみずしかったけれども、かじるととても酸っぱかった。

*

*

しかし、父から林檎の皮むきの仕方を教えてもらつた日はとうとう来なかった。

父が術後に併発した肺炎が元で、あっさり命を落としてしまったのは、手術のわずか二日後のことであつた。

その六

ばたばたとした通夜と葬儀が終わった日の夜、私が実家でひとりぼうつとしていて、携帯がなった。しばらく鳴ったままにしておいたが、切れる様子がないので、取ってみると、

「夜分にごめん」

電話の主は相川だった。

「ううん。いいよ」

「今仕事おわったとこなんだ。遅番でなけりや、葬式にも行きたかったんだけど」

「センター長と副センター長が来たよ。お花も弔電もいただいたし」「それは会社からだろ。線香だけでも思っただけど、もう遅いしな。とりあえず、電話で」

「うん。気持ちだけでもうれしいよ」

私は電話を手にながら、床にごろんと転がった。

「大丈夫か」

「なんとかね。今遺品を整理していたとこ。整理つていても、きちんとした人だったから、逆に私がいれこれ引っ張り出して、散らかしているってとこかな」

実際、六畳一間の居間は散らかり放題と言っても良いぐらいだった。衣類や本などがある物は雑然と積み込まれ、ある物はその山が崩れたままに放置されている。皆つい先程まで、私が並べて置いていったものだった。

「ひとりなのか？」

「うん」

「親戚の人とかは」

「あたしがひとりにしておいてって頼んだの。ひとりでいることに慣れてとかないとね。これからずっとこの家で暮らすことになるんだし」

もう私が甘えることができる人はいない。私はひとりで生きていかなければならないのだ。

「しばらく仕事の方は休むことになるけど……私がいなくても平気だよ」

「皆さみしがっているから、早く元気な顔を見せてくれよ」

「ありがと。大丈夫だよ」

そう答えたが、私はあの職場に復帰しようという意欲は、もうほとんど残っていないかった。

「……あ、そうだ。センター長に言つといて、例の件、せつかくですけれど、お断りしますって」

「例の件って」

相川の声はどこかいぶかしげだったが、かまわず私は続けた。

「知ってるでしょ。私が眞子ちゃんの代わりに総務部に移る話。直接会って話したかったんだけど、復帰まで時間かかりそうだし」

次に行く時は、退社の挨拶をしに行くことになるだろうし……なとと、私がうつすらと考えていると、突然、

「なんだよそれ。聞いてないぞ、そんな話」

相川からかなりの怒気を含んだ大きな声がかえってきた。

「……嘘」

「嘘じゃねえよ。リーダー・ミーティングでも、人事異動の話なんてでなかったし、だいたい、来月のシフト申請、昨日だしたばかりだぜ。当然お前さんが電話に出ることを前提に組んだものだよ。それ見た時だって、センター長何も言わなかったぞ」

するとすべてはあの「プレーリードック」の独断専行だったというのか。ますますあの男の器の小ささを実感させられる。でも、どんな理由があつたにせよ、そんなことはもうどうでもよかった。「その件は、明日にでも俺の方で確認とるから。追って連絡する。島田は何も心配しなくていいから」

「……」

「島田？」

「あ、うん。聞いているよ。ありがとね。……でも、そこまでしなくてもいいのに」

もう、やめるつもり、なんだよ、わたしは。

「なにいつてんだよ。そんな理不尽な目にあわせておいて、黙ってるわけにはいかないよ。たとえ移動するってことになったって、普通はもつと前から調整の上で話をすすめることだろ。なにより、島田はウチに必要な人間なんだよ。なのにそんな勝手なことされたたまるかよ」

必要な、人間？ 普段は冷静な相川が別人のように、私のために怒ってくれている。私を心配してくれている。私にきちんと向き合ってくれている。……。

「あ、なんか一方的に喋ってるな、俺。ごめんな、こんな時に」
相川は私の沈黙の理由を勘違いして、侘びを入れてくれた。

「とにかく、任せておいてくれていいから。島田は落ち着いてから、ゆっくり社に出てこいよ」

「うん。……本当にありがとね」

ありがと、本当に。

「……じゃあ、もう切るね」

「ああ、遅くに電話して悪かったな」

私は電話を切ろうとしたが、指が震えてボタンを押すことができなかった。あれ？ どうしたんだろ。

「島田？ どうした、島田？」

心配そうな相川の声が響いてくる。電話を切ってしまったら、私はこの家にひとりきり。父もいない、この家に。誰もいない、この家に。ずっとずっとひとりきり。

でもそれは、しょうがないことではないのか？ 覚悟していたことではないのか？

「……相川……ごめん、そっちから、電話、切ってくれる？」

私は震える声でそうつぶやいた。……だけど、
ただでただで。

「相川！ 待つて！」

次の瞬間、そう叫んでいた。私の心からの願いだった。この電話を切ってしまうば、この世界で本当にたったひとりになってしまふ。相川とのかすかなつながりですらも、断ち切られてしまふかのよう
に思えたのだ。

葬式の間、一粒の涙もこぼさなかった私は、その時はじめて泣いた。心の底から、激しく慟哭した。あまりの寂しさに、もう耐えられなくなっていた。この時になって、私は父の死をやっと理解できたかのようにだった。私は強がっていながらも、誰かに依存して生きてきたのに過ぎなかったのだ。なんと傲慢であつたことだろう。でもそんなわがままな娘を、父はずっと信頼し、遠くからでもずっと支えてくれていたのに。

「落ち着いた？」

私の嗚咽が小さくなったからだろうか、やがて携帯から相川の心配そうな声が聞こえてきた。私はどのくらい泣いていたかわからないが、その間も彼はずっと待つていてくれたらしい。

「ねえ……今から、こっちに来てもらう、ってお願いしてもいいかな」

「いいよ。島田がそうして欲しいって言うなら」
すぐに返事が返ってきた。

「……」

「これからも、俺の助けがいる時はいつでも呼んでくれていいから俺はどんなときも島田の力になりたいと思ってるんだぜ」

私は心の中で何度も何度も礼を言つた。ありがとう、相川。彼はこんな私に対しても、手を貸してくれるようだ。でもおかげで少しだけ、強がりを言えるぐらいにまで、私は立ち直ることが出来た。

「何それ……ひよつとして口説いているの」

と、私が泣き笑いながらそう言つと、

「……かもな」

彼はいつもの口調でそう返してきた。電話の向うで肩をすくめる

相川の姿が目には浮かぶ。

「ねえ、相川は林檎の皮むきつてできる？」

私はふと思いついて、問いかけてみた。

「ああ、うまいもんだぜ」

これまた速攻で、自信満々な言葉が返ってきた。

「じゃあ、着いたら、まずは、それをやってもらおうかな」

「いいとも」

私はわがままで。結局私は、父の変わりを相川につとめてもらうとしていただけなのかもしれない。それでも彼らは、こんな私を認めてくれているのだ。私は最後まで父に追いつくことも、父の恩に十二分に報いることもできなかったけれど、相川になら、少しはそのお返しをしてあげられるかもしれない。

だから、今日は、せめて今晚だけは。

まずはその優しさに、この身をゆだねさせてもらっても良いだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7173p/>

ため息いくつ

2010年12月30日20時10分発行